

共感的喜びと妬み

—— その実態に迫る自由記述回答についての分析 ——

西 隅 良 子

1. 問題

我々は、日常生活の中で、自らは全く知らない人でも、その人に宝くじに当たるなどの良い出来事が起こったとき、その他者の幸福を喜んだり、また、妬ましく思ったり、その時々々の状況によって複雑に様々な情動を経験している。なぜ、このように、他者に起こった出来事が自分自身に直接関係がない場合でも、様々な情動を経験するのだろうか。果たして、このような情動の特質や強度、および、それらを規定する要因や発生メカニズムなどについて、現代の心理学においては、どこまで明らかにされているのだろうか。この疑問をもとに、まずは、これまでの情動研究の流れを概観することから始めることにしたい。

(1) これまでの情動研究

情動の心理学的研究は、まず、James (1890) による生理心理学的アプローチから始められたと言ってよい。しかし、その後、行動主義心理学が台頭すると、情動は研究対象とするにはあまりにも複雑であり、主観的で非合理的なものと考えられるようになり、その実証的な研究は方法論上困難であるとされるようになる。そのため、情動は近代心理学にはなじまないものとみなされ、長い間、心理学において主要な研究領域とはされてこなかったと言える。しかし、近年、情動は、心理学および医学・生物学あるいは認知工学など、様々な学問領域において、学際的に脚光を浴びるに至っている。

たとえば、比較行動学や進化生物学の発展によって本能論が再評価されたことにより、基本的情動理論が支持されるようになった。基本的情動理論

とは、もともとは、ある生物個体が生存していく上で必要なために進化の過程を経て残ってきたものと考えられている、怒り、喜び、驚き、恐れ、悲しみ、嫌悪といった最も基礎的な情動を人間が持っているという考えである。Izard (1971) ら多くの研究者によって、それぞれ独自の基準が設けられ、種類も数も様々な基本的情動が提唱されているが、Ekman (1992) によって挙げられた上の6つの情動がいわゆる基本的情動のビッグ6とされることが多い。また、認知心理学においては、情動の生起メカニズムに関する現代の代表的な理論である認知的評価理論 (appraisal theory) が隆盛を極めている。認知的評価理論とは、もともと Lazarus (1968) がストレスの研究において、刺激を脅威的なものとそうでないものに弁別する過程を認知的評価としたことから始まり、個体が遭遇した事象が、その個体の(潜在的な)利害関心に関わるものかどうかの評価され、関わるかどうかというその評価の結果によって、情動生起の有無や強度、種類が規定されると仮定するものである。

しかし、私たちの日常生活に照らして考えるとき、これらの理論で暗黙裡に扱われている情動とはいったいどのようなものなのだろうか。基本的情動は、ある事柄が自己にとって有益なのかまたは有害なのかを瞬時に判断し、接近するのかまたは回避するのかといった、その個体が次にとるべき適切な行動を導く役割を担っているものであり、つまりは、何らかの出来事の自分自身にとっての利害に応じて生じる一過性の心身反応である。それは、自己が直接関連した出来事にのみ生じる情動、いわばその出来事に「当事者」として関わる

ときに経験される「当事者情動」ということが出来るだろう。認知的評価理論もまた、情動が個体の生物学的・社会的適応を、迅速にまた高度に保証する心理行動的システムであるという考えを基礎に有しており、この理論においても基本的には、個体自らの利害に関連する情動のみが専ら取り上げられてきたと言える。

もちろん、近年の情動研究の流れの中において、必ずしも、こうした「今ここでの利害」に絡むものばかりではない、より複雑な情動も研究のターゲットになってきていることは確かである。とりわけ、自己と他者との関係性や、他者の目に映る自己の姿などについての複雑な意識が絡む、いわゆる自己意識的情動（self-conscious emotion）などは、多くの研究者が高い関心を寄せるところである。しかし、こうした自己意識的情動にしても、基本的情動理論や認知評価理論で扱われていた情動ほどにダイレクトな利害ではないにせよ、他者との関係の維持や向上などが、結局、本人自らの利害に関連している点では同じであり、やはり、そこで問題にされるのは、結局のところ、「当事者」の情動であるということが出来る。

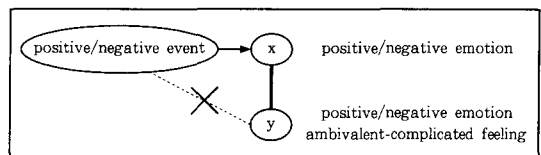
このように、これまでの心理学における情動研究では、「当事者情動」とでもいうべき、自らの利害に深く関係する出来事に対して生起する情動のみが主たる研究対象として取り上げられてきたことがわかる。しかし、我々が日常生活において経験する情動は当然こればかりではない。冒頭で挙げた宝くじの例のように、我々は、自分自身の利害に直接絡まない、他者に生じた出来事についても、時に様々な情動を経験し得ると言えるだろう。しかし、こうした、いわば「非当事者」が経験する情動に関しては、これまでの心理学の中で、あまり検討されていないというのが実情なのである。

(2) 「非当事者」の情動

上述したように、これまで多くの情動研究が行われてきてはいるが、その主たる対象は、個体自らの利害関心に直接絡む「当事者」の情動であっ

た。換言するならば、これまでの情動研究は、「事象（e）」と「事象の直接経験者（x）」との“二項”関係の性質によってxの情動の生起の有無およびその種類や性質が規定されるという側面に主たる関心を払ってきたといえるのである。しかし、筆者が、本研究において問題にしようとする「非当事者」が経験する情動とは、「事象（e）」「事象の直接経験者（x）」、そしてその「事象には直接関係しない第三者（y）」という、いわば“三項”関係の中で生じるものである。すなわち、eがxに降りかかったことによって生じるyの情動経験に焦点を当てようとするのである。そうした意味で、こうした非当事者が経験する情動をここではあえて「三項関係情動」と呼ぶことにしたい（図1参照）。

図1 三項関係情動



もっとも、こうした三項関係情動を理解するための理論的手がかりが、これまでの心理学の諸知見の中に全く見出せないというわけでもない。例えば、三項関係情動そのものに関心を寄せ、それを実証的に吟味しているわけでは必ずしもないが、それに潜在的に深く関わり得る重要な理論枠として、社会心理学における「社会的比較理論」が挙げることができる。社会的比較理論とは、基本的に、人は、自己に関する不確かさを減少させようとして他者と自己を比べ、正確な自己評価を行うことによって、環境に対してより望ましい適応をはかると仮定するものであり、そしてこの社会的比較には、自己よりも優れたあるいは有利な立場にある他者と比較する上方比較と、自己よりも相対的に劣ったあるいは不利な状況にある他者と比較する下方比較という大きく2種類のあるとされる（Festinger, 1954）。

社会的比較理論の中でも、とりわけ、本研究で問題にする三項関係情動にきわめて示唆的な理論

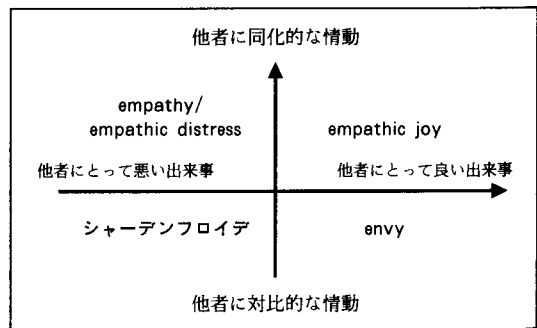
モデルに、Smith (2000) の研究がある。Smith は、人が社会的比較によって時に非常に強い情動を経験し得ること、また、その比較が上方比較か下方比較かによって経験される情動の種類や性質が大きく異なり得ることを示している。さらに、社会比較の感情反応についての主な研究が、上方比較に対するネガティブな感情と下方比較に対するポジティブな感情のみに集中していることを指摘した上で、上方、下方のいずれの比較においても正負両方の感情が経験され得ることを述べ、比較が下方か上方かということと、そこで経験される情動が他者の心的状態に同化的か（他者の情動と同質の情動を経験するか）あるいは対比的か（他者の情動とは対極をなす情動を経験するか）ということの組み合わせによって、“下方同化的情動 (downward assimilative emotions)” “下方対比的情動 (downward contrastive emotions)” “上方対比的情動 (upward contrastive emotions)” “上方同化的情動 (upward assimilative emotions)” という4タイプの情動が存在し得ることを仮定している。

実のところ、この4タイプの情動はそれぞれ、三項関係情動の中の特に中核的な情動に対応しているものと考えられる。より具体的にいえば、“下方同化的情動”に対応する情動は、他者にネガティブな事象が生じた際にその周りに位置する個体が覚える代理的な苦痛の経験である、共感 (empathy) あるいは共感的苦痛 (empathic distress) であると言えよう。一方、“下方対比的情動”に対応するのは、他者が何らかの辛い状況にある場合に、「いい気味」といった、ある種の喜びにも似た快感情、すなわちシャーデンフロイデ (schadenfreude) ということになるだろう。また、“上方対比的情動”に対応する情動は、賞をもらう、昇進するなど、他者にポジティブな事象が生じた際に、それを見聞きした個人が覚える相対的にネガティブな情動、すなわち妬み (envy) であると言えるだろう。最後に、“上方同化的情動”に対応する情動は、他者が良い状況にある場合に、その他者の幸せを自分自身のことのように他者と

共に喜ぶ「共感的喜び (empathic joy)」とでもいうべき情動ということになるだろう (Smith 自身は“上方同化的情動”の代表的なものとして、「賞賛 admiration」とともに、共感的喜びとよく似たインスピレーション (inspiration) という情動を挙げている)。ちなみに図2には、他者にとって良い出来事が生じたのか悪い出来事が生じたのかという軸と、その時、それに接した個人が、他者が経験するであろう情動と同化的な情動を経験するのか対比的情動を経験するのかという軸を直交的に組み合わせる形で、上述した4つの代表的な三項関係情動を配置してある。

これら4つの三項関係情動のうち、これまで最も多くの関心が寄せられ研究が進められてきたのは、共感あるいは共感的苦痛であり、また、ほとんど研究されてこなかったのは共感的喜びやシャーデンフロイデと言えるだろう。

図2 4タイプの三項関係情動



共感あるいは共感的苦痛という情動は、有史以前から人類の間に普遍的に存在していたと考えられている。人類が社会を作り上げ、維持していくには、人と人とを感情的に結びつける何かがあったはずであり、それが、共感であったと推測されている。学問においては、「同情」や「あわれみ」「感情移入」という語によって、現代の共感に近い概念が、17世紀ごろから、哲学、倫理学、美学などで取り上げられてきた。心理学で共感が扱われるようになったのは20世紀に入ってからであるが、共感生起のメカニズム、共感の生物学的な基礎、共感の測定法、共感の個人差、共感過程の発

達、さらには、共感と利他的行動の関係などについて、実に数多くの知見がこれまでに得られている (e.g. Davis, 1996)。

しかし、これまでの情動研究を概観するとき、「三項関係情動」の中でも、共感あるいは共感的苦痛以外の情動についての研究は相対的に稀少であり (もっとも妬みについては最近、嫉妬という情動との関連で部分的に取り上げられてきてはいるが)、特に、「シャーデンフロイデ」や「共感的喜び」に相当する情動を、実証的心理学研究の枠内に見出すことはほとんど出来ない。さらに、他者に正負いずれかの事象が生じたという同様の状況にありながら、ある時は共感的苦痛を、ある時はシャーデンフロイデを、またある時は共感的喜びを、ある時は妬みを覚えるということがあるわけであるが、それはどのような要因によって分岐してくるのか、その全体的なメカニズムが、既成の情動理論からはいっこうに見えてこないというのが現状である。こうした情動に関して理論的枠付けを作ることが、今後の情動研究全般に新たな地平を拓き得ることはほぼ確実であるといっても過言ではないかもしれない。

むろん、本来であれば、こうした代表的な三項関係情動のすべてを取り上げて論じるべきであるが、筆者は、その第一段階として、本研究において、先に述べた潜在的に上方比較が生じ得る状況、すなわち他者に何か良い出来事が起きるといふポジティブな状況に限定し、その状況下で「非当事者」が経験し得る「共感的喜び」と「妬み」の諸特質について探索的に明らかにしたいと考える。

(3) 妬み (envy) と共感的喜び (empathic joy)

先に見た Smith (2000) などの枠組みに従うならば、「妬み」と「共感的喜び」は、他者に何か良い出来事が起きるといふ同じ状況において経験される、相反する情動であると考えられる。日常生活において、人は、他者に良い出来事が起こったとき、どのように、これらの相反する情動を経験しているのだろうか。そして、他者の幸福を喜んだり妬んだりするという事実があるとき、どの

ような場面において「共感的喜び」を、または「妬み」を経験するのだろうか。また、「共感的喜び」か「妬み」といったように両極端な情動だけでなく、「共感的喜び」と「妬み」が入り混じった複雑な気持ちを経験していることも充分考えられるだろう。これらの情動は、どのような他者に対して、どのような出来事が起こった場合に、いかなる内容を持って経験されているのだろうか。

本研究では、これまでの先行研究がきわめて少ないという実情から、自由記述を中心とするボトムアップ的な方法を用いて、日常の中で「共感的喜び」や「妬み」がどのような場面でどのような他者に対してどのように経験されているのか、その実態を明らかにすることを目的とした。なお、今回の研究においては、「共感的喜び」や「妬み」といった経験される情動の生起に影響が想定された状況的な要因を探索し、それについて明らかにした修士論文研究のうち、第一研究と第三研究の自由記述部分の回答をもとに分析を行うことにした (第二研究では自由記述回答を求めた質問を設定していないため、今回は第二研究について記載していない)。

2. 第一研究 方法

対象は、18-25歳の大学生・大学院生・専門学校生348名 (男性172名、女性176名) である。対象者の平均年齢は19.8歳 (SD 1.76、range:18-25) であった。

調査者や調査者から依頼を受けた教員が授業時間内に質問紙を配布し、集団で質問紙に回答させ、回収した。2002年10月～12月に質問紙調査を行った。

調査に用いた質問紙では、情動経験についての実態把握のために、回答者がこれまで身近な他者に良い出来事が起こった際に共感的喜びと妬み、さらに、共感的喜びと妬みが入り混じったような複雑な情動が経験された場合のエピソードを一つずつ想起してもらい、それぞれのエピソードの中で、良い出来事が起きた他者が誰だったのか、また、他者に起こった出来事とはどのような事柄だっ

たのか、さらに、その出来事が他者に起きたとき、回答者自身がどのような気持ちを経験したのかを自由記述で回答してもらった。質問紙では、「共感的喜び」という表現は回答者にとって耳慣れないものであると考えられたので、代わりに「嬉しい気持ちや良い気持ち」という表現を用い、他者に良い出来事が起こった際に経験したポジティブ情動全般について問うた。また、「妬み」という表現は、回答者に社会的望ましさを意識させ、エピソードの記述に抵抗感をもたらすと予想されたため、「不愉快な気持ちや嫌な気持ち」という表現を用い、他者に良い出来事が起こった際に経験したネガティブ情動全般について問うた。さらに、共感的喜びと妬みが入り混じったような複雑な情動については、「嬉しくなるような良い気持ちと不愉快になるような嫌な気持ちが入り混じった複雑な気持ち」と表現した。

回答者の身近にいる他者が良いものを手に入れたり、すばらしい賞を得たというように、良い出来事が起こったとき、回答者自身が「嬉しい気持ちや良い気持ち」「不愉快な気持ちや嫌な気持ち」「嬉しくなるような良い気持ちと不愉快になるような嫌な気持ちとが入り混じった複雑な気持ち」のそれぞれの気持ちを経験したときのエピソードを一つずつ思い浮かべてもらい、それぞれについて次のような質問をした。

- ① 良い出来事が起こった他者が誰だったのか
- ② 他者にどのような良い出来事が起こったのか
- ③ そのとき自己(回答者)が経験した情動とはどのようなものだったのか

フェイスシートでは、年齢、性別、きょうだい構成を聞いた。

3. 第一研究 結果

質問紙調査の結果、他者に良い出来事が起こったときに「良い気持ち」「嫌な気持ち」「複雑な気持ち」それぞれが実際に経験されていることが確かめられ、また、その各状況や経験された気持ち

について実態が明らかにされた。

(1) 3つの気持ちで挙げられた他者

「良い気持ち」「嫌な気持ち」「複雑な気持ち」のいずれの気持ちを経験したエピソードについても、そのエピソードに登場する良い出来事が起こった他者として、「友人」を挙げるものが最も多かった(他者として「友人」を挙げた回答者のパーセンテージ、「良い気持ち」65%、「嫌な気持ち」53%、「複雑な気持ち」52%)。

(2) 他者に起こった良い出来事

他者に起こった良い出来事の内容として、「受験での合格」「部活でのレギュラーの獲得」「恋人が出来る」などが多く挙げられた。その他では「賞を得る」「良い成績をとる」「宝くじが当たる」「結婚・出産」なども挙げられた。挙げられた全ての出来事を出来事の内容によってグループ分けし、3種の気持ちと男女別にその分布を調べた。その結果、「良い気持ち」を経験した場合の出来事として、男女全体では、大学や高校、資格試験などへの「合格」が最も多く(34%)、次にクラブ活動などでの「活躍・受賞・選抜」が多かった(28%)。男性だけ、女性だけでも同様に、「合格」が最も多く、次に「活躍・受賞・選抜」が多かった(男性:32%、28%、女性:36%、27%)。「嫌な気持ち」においては、男女全体では、「活躍・受賞・選抜」が最も多く(21%)、次に「合格」が多かった(14%)。男性だけ、女性だけでも同様に、「活躍・受賞・選抜」が最も多く、「合格」が次に多かった(男性:21%、11%、女性:21%、16%)。また、「複雑な気持ち」においては、男女全体では、彼氏や彼女が出来る「恋人」が最も多く(17%)、次に「合格」が多かった(14%)。男性だけ、女性だけでも同様に、「恋人」が最も多く、次に「合格」が多かった(男性:16%、11%、女性:17%、16%)。調査の対象者の多くが20代前後の学生だったこともあり、挙げられたエピソードの内容として、現在通う大学や専門学校での出来事よりも、高校時代など過去の出来事が多く挙

げられていた。

(3) 経験された3つの気持ちの内容

経験された情動がいったいどのようなものであったのか、その詳細について自由記述での回答から全体像をとらえた。得られた回答を3種それぞれの気持ちにおいて、カテゴリーに分けた。良い気持ちでは、他者に起こった良い出来事に対して、『良かったね』という気持ち』『おめでとう』『嬉しい』といった共感的喜びに相当する情動を経験しており、他に、尊敬、賞賛、誇らしさ、「自分も頑張ろう」といった気持ち、安心といった気持ちを体験していた。また、複雑な気持ちでは、『良かったね』と思いつつも、うらやましい・悔しい』といったような、相手の幸福を喜びながらも、一方で、それを他者だけが手にしていることをうらやましく、または、悔しく思ったりしている気持ちの他に、特に、友人に恋人が出来る場合において、相手の幸福を喜びながらも自分の元から離れていってしまうことに対して「寂しく思う気持ち」、さらに、相手の幸福を喜びながらも、自分ではなく相手が幸福を手にしたことに対する「怒りを感じる気持ち」などを体験していることを示す回答が見られた。そして、嫌な気持ちにおいては、『悔しい』『妬ましい』『(悪意の感じられる)うらやましい』といった妬みに相当する情動を経験している人がかなり多く見られた。その他では、腹立たしさや、どうして他者が幸福を手に入れたのか納得がいけないという不公平感を顕わにした気持ちについての記述もみられた。男性の多くが『悔しい』という気持ちを体験していたが、女性の多くが『他者だけが優位に立つことについてずるい』『他者が幸福になることについてうんざり』といった腹立たしさを挙げていたことが顕著な傾向としてみられた。

4. 第一研究 まとめ

以上の結果より、第一研究では、日常の中で、他者に良い出来事が起こったときに、共感的喜びや妬みといった情動が実際に経験されていること

が確かめられ、また、それらの情動が経験される状況について実態を把握することが出来たといえるだろう。この調査では、対象が20代前後の学生であったため、エピソードの他者に「友人」を挙げた者がほとんどであった。このことから、情動が、他者により異なって経験されるのかどうかは確かめられなかったが、しかし、3つの情動が他者に起こった出来事の内容によって異なっていることが示された。他者が試験に合格するというように、他者と自己が異なった目標(受験校など)を持つケースが多く考えられる場合に「共感的喜び」が経験されやすく、他者の活躍や受賞といった、客観的な賞賛を他者が手にするような出来事について妬みが経験されやすいことが伺われた。経験された情動は、多くの場合が、良い気持ちの場合は「共感的喜び」、嫌な気持ちの場合は「妬み」として経験されていたが、他に、「誇らしい気持ち」や、「腹立たしさ」などとして経験されている場合もあり、自己に直接関係のない出来事に対しても、人が多様な情動体験をしていることが推測された。

5. 第三研究 方法

対象は、関西圏の大学生・大学院生277名(男性101名、女性176名)であり、対象者の平均年齢は20.9歳(SD 1.17, range:19-25)であった。調査者や調査者から依頼を受けた教員が授業時間内に質問紙を配布し、集団で回答させ、回収した。2002年11月~12月に質問紙調査を行った。

調査に用いた質問紙では、回答者が、過去に、他者に良い出来事が起こった際に、他者と共に喜んだり、また、他者を妬ましく思ったりした経験がある場合、それらの経験についての具体的なエピソードの記述を求めた。なお、この質問への回答は自由なものとし、エピソードの記述などに差し支えない者だけに回答を求める形式とした。

6. 第三研究 結果

調査の結果、質問に対して何らかの回答を記述した者は93名であった(男性37名、女性56名)。

これは、質問紙に回答した全回答者の約34%（男性約37%、女性約32%）に当たる。記述されたエピソードは、他者に良い出来事が起こったときに経験したネガティブ情動に関するものが53ケース（男性20、女性33）、ポジティブ情動に関するものが67ケース（男性28、女性39）、いずれの情動に関するものか把握しきれなかったものが8ケース（男性4、女性4）、計124ケースであった。

(1) 原因帰属への言及

回答された記述内容を分析すると、多くの回答者が、他者に良い出来事が起こる以前に、その他者が良い結果を得るために努力をしていたかどうかについて言及していることが明らかとなった（努力の有無について言及したエピソード総数33。〈男性10、女性23〉）。経験された情動の内容別に見た場合、ポジティブ情動では（ポジティブ情動を経験したエピソードのうち、努力の有無について言及したエピソード数18。〈男性5、女性13〉）他者が『合格するまで努力していたことを知っていたので共に喜べた』といったように、回答者自身が他者の努力の過程を知っていたことが、共感的喜びに結びついたことを示す回答がみられた。ネガティブ情動では（ネガティブ情動を経験したエピソードのうち、努力の有無について言及したエピソード数15。〈男性5、女性10〉）、他者が『練習していなかったのに、レギュラーに選ばれていたのに妬ましかった』といったように、他者が自らの努力ではなく、運や才能といったもので良い結果を得ている場合に妬みを経験していることを示す回答が多く見られた。また、ネガティブ情動で見られたその他の回答には、『友達も勉強していたが、自分も同じように勉強していたのに、友達だけが試験に合格したときは悔しくて泣いた』というように、他者と自分が同じように努力していたのに、他者だけが良い結果を手にしたといった状況において、妬ましさや悔しさを経験したことを示すエピソードも見られた。

(2) 親密さの程度への言及

また、良いことが起きた他者と自己との仲の良さの程度について言及している回答も見られた。仲の良い他者よりも仲の悪い他者に対して、ネガティブな気持ちを経験するといった回答が多く見られたが、それだけではなく、仲の良い他者に対してもネガティブな情動を経験することについても同様に多く述べられていた。中には、仲の悪い人よりも、むしろ仲の良い人に対して、ネガティブな情動を強く経験するという回答も見られた。

(3) 出来事が起こった際の自分の状態への言及

さらに、他者に良い出来事が起きた際に、他者と共に喜べるか、または、他者を妬むかは、そのときの自己（回答者）の状態によるとする回答が見られた。『自分の合格が先に決まっていたので、友達の合格は心から喜べた』という回答のように、回答者自身の状態が安定した幸福なものであってこそ初めて、他者の幸福を共に喜ぶことが出来るのだという傾向が伺われた。また、『自分の結果はまだ決まっていなかったが（自分の結果は良くなかったが）、友達が合格したことは共に喜べた』というように、他者の幸福が回答者にとって本当に嬉しい出来事であった場合に、自分自身の状態に関わらず、共に喜べる場合もあるということを示すエピソードも見られた。

(4) 出来事の自分にとっての意味

他者に起こった良い出来事が、自分も他者と同じように、以前から目標としていた事柄であったり、他者よりも自分の方がより専門としている分野であるというように、他者に起こった良い出来事が、自分にとってどれほど重要なものかにより、経験される情動が異なることを示す回答も見られた。当然、自分も手に入れたいと思っていたような良い出来事（同じ部活でのレギュラーへの選出など）であれば、他者の幸福を自分自身のことのように共に喜ぶというのは難しい事柄となるが、自分自身とは全く関係のない出来事であれば、比較的容易に一緒に喜ぶことが出来るようであった。

(5) 多様なネガティブ情動

また、経験されている情動の内容についての記述も見られた。他者に良い出来事が起き、回答者がネガティブ情動を経験する場面において、筆者が想定した「妬み」や「悪意のあるうらやましさ」といった情動の他に、「しらけた気分」「どうでもいい気分」「無関心」といった気持ちもまた多く経験していることが分かった。

7. 第三研究 まとめ

得られた回答の分析の結果、他者に良い出来事が起こった際に、人は、他者の成功までの過程や、他者との親密度、出来事の自己にとっての意味など様々な判断材料から、意識下で「共感的喜び」や「妬み」を経験し分けていることが示唆された。また、ネガティブ情動では、妬みや悪意の感じられるうらやましさの他に、しらけた気分や無関心といった、比較的積極的でない情動を経験している場合もあった。これらの情動は、他者の良い出来事を冷ややかに評価している点において、確実に不快な情動の一つと考えられるが、妬みや悪意の感じられるうらやましさとといった情動ほど積極的なものではなく、むしろ、妬みなどの積極的なネガティブな情動を経験することを無意識的に回避した情動であるように考えられた。

8. 考察

第一研究と第三研究の自由記述回答の分析から、「出来事の内容」や「原因帰属」、「他者との親密度」や「他者がこれまで回答者にとっての態度」、他者に良い出来事が起こったときの「回答者自身の幸福状態」といった様々な事柄が、経験される情動の内容に影響を与えていることが伺われた。

筆者は、本研究より先に修士論文において、「共感的喜び」と「妬み」を経験し分ける状況的な要因の探索を行い、想定された状況要因について数量的な分析と考察を行っている。その結果において、人は仲の良い人に対して、また、出来事が自分にとって重要な意味を持たない場合や、さらに、他者が運などではなく努力で良い結果を手

に入れた場合に「共感的喜び」を経験しやすいこと、そして、回答者に良い出来事が起こったときに共に喜んでくれた経験がある場合や、悪い出来事が起こった場合に共に悲しんでくれた経験がある場合に「共感的喜び」を経験しやすいということが明らかとなっている。本研究の自由記述回答についての分析結果は、これらの修士論文の数量的分析によって出された結果を支持するものとなった。このように、質的な分析と数量的な分析の双方から支持されたことから、上に挙げた要因を、他者に良い出来事が起こったときに経験される情動の内容に影響を与えている状況要因のひとつとして、信頼性を持ってみなすことができるのではないだろうか。

筆者は、今後もこのように数量的な研究と質的な研究をうまく活用し、今回取り上げた「共感的喜び」と「妬み」についての状況要因の他、他に影響が予測されている個人内要因についてその関与を明らかにすること、また、「共感的喜び」や「妬み」に加え、「シャーデンフロイデ」や「共感的苦痛」といった三項関係情動全般についてその発生メカニズムを明らかにする研究を行っていきたいと考えている。

参考文献

- Davis, M. H. (1996). *Empathy: A social psychological approach*. Boulder: Westview Press.
- Ekman, P. (1992) An argument for basic emotions. *Cognition and Emotions*, 6, 169-200.
- Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, 7, 117-140.
- James, W. 1890 *The principles of psychology*. Dover Publications.
- Lazarus, R. S. 1968 *Emotions and adaptation: Conceptual and empirical relations*. Nebraska symposium on motivation. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Smith, H. R. 2000 Assimilative and Contrastive Emotional Reactions to Upward and Downward Social Comparison. In Suls & Wheeler

(Eds.), *Handbook of Social Comparison:
Theory and Research*. New York: Kluwer

Academic/ Plenum Publishers.

(修士課程)